

第 1 期神奈川県スポーツ推進計画の概要 とスポーツを取り巻く現状について

1 第1期神奈川県スポーツ推進計画の概要

1 第1期神奈川県スポーツ推進計画の概要

(1) 計画策定の趣旨

県全体で確実にスポーツの推進を図り、誰もが生涯にわたりスポーツに親しむことができる地域社会を実現していくため、2017（平成29）年3月に神奈川県スポーツ推進計画「エンジョイ・スポーツ！ かながわプラン」を策定。

(2) 計画策定からの経過

2017（平成29）年3月	策定
2023（令和5）年3月	見直し

(3) 計画の目標年度

2025（令和7）年度

(4) 計画の位置付け

- ・ 神奈川県スポーツ推進条例第5条に定める「推進計画」
- ・ 県の総合計画「新かながわランドデザイン」を補完する個別計画
- ・ スポーツ基本法第10条に定める「地方スポーツ推進計画」

1 第1期神奈川県スポーツ推進計画の概要

(5) 基本目標

- | |
|---|
| ① 誰もが、「いつでも」「どこでも」「いつまでも」スポーツに親しめる生涯スポーツ社会の実現 |
| ② スポーツの持つ力による、前向きで活力ある社会と、共生社会の実現 |

(6) 数値目標（令和7年度）

項目		目標値
成人のスポーツ実施率 (満20歳以上)	週1回以上	70%以上
	週3回以上 非実施率	35%以上 0%に近づける
子どものスポーツ実施率 (6歳から18歳まで)	週3回以上	55%以上
	非実施率	7%以下
障がい者のスポーツ実施率 (満20歳以上)	週1回以上	40%以上

1 第1期神奈川県スポーツ推進計画の概要

(7) 数値目標の推移（平成16年度～）

		平成									令和								
		16～22		23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8
成人	県	スポーツ振興指針 ○週1回以上 50%以上 ○非実施率 低下させる			スポーツ振興指針（改定） ○週1回以上 50%以上 ○非実施率 低下させる						スポーツ推進計画 ○週1回以上 65%以上 ○週3回以上 30%以上 ○非実施率 0%に近づける				スポーツ推進計画（見直し） ○週1回以上 70%以上 ○週3回以上 35%以上 ○非実施率 0%に近づける				
	国	スポーツ振興基本計画 ○週1回以上 50%以上			第1期スポーツ基本計画 ○週1回以上 65% ○週3回以上 30% ○非実施率 0%に近づける						第2期スポーツ基本計画 ○週1回以上 65% ○週3回以上 30% ○非実施率 0%に近づける				第3期スポーツ基本計画 ○週1回以上 70% ○年1回以上 100%に近づける ○非実施率 0%に近づける				
子ども	県	スポーツ振興指針 ○週3回以上 50% ○非実施率 10%以下			スポーツ振興指針（改定） ○週3回以上 50% ○非実施率 10%以下						スポーツ推進計画 ○週3回以上 55%以上 ○非実施率 10%以下				スポーツ推進計画（見直し） ○週3回以上 55%以上 ○非実施率 7%以下				
	国	スポーツ振興基本計画 ○体力について、その低下傾向に歯止めをかけ、上昇傾向に転ずることを目指す			第1期スポーツ基本計画 ○子どもの体力が昭和60年頃の水準を上回るようにする						第2期スポーツ基本計画 ○スポーツをする時間を持ちたいと思う 中学生 80% ○スポーツが嫌い・やや嫌いである 中学生 8% ○子供の体力を昭和60年頃の水準にする				第3期スポーツ基本計画 ○1週間の総運動時間(体育を除く)が60分未満 ・児童の割合 12% (R3)から半減 ・生徒の割合 13% (R3)から半減 ○卒業後にも運動やスポーツをしたいと「思う」「やや思う」 ・児童の割合 90%以上 ・生徒の割合 90%以上 ○新体力テストの総合評価がC以上である ・児童の割合 80%以上 ・生徒の割合 85%以上				
障がい者	県	スポーツ振興指針 —			スポーツ振興指針（改定） —						スポーツ推進計画 —				スポーツ推進計画（見直し） ○週1回以上 40%以上				
	国	スポーツ振興基本計画 —			第1期スポーツ基本計画 —						第2期スポーツ基本計画 ○週1回以上 40% ○週3回以上 20%				第3期スポーツ基本計画 ○週1回以上 40%（若年層は50%） ○年1回以上 70%（若年層は80%）				

1 第1期神奈川県スポーツ推進計画の概要

(8) スポーツ推進の施策・事業体系

視点1 誰もが生涯を通じて楽しめるスポーツ活動の推進

施策	主な取組
①楽しみながら行うスポーツへのきっかけづくり (主に乳幼児期)	家庭での遊び・運動の推進 地域での遊び・運動の推進
②スポーツに親しむ意欲や態度の育成 (主に児童・青年期)	体育・健康教育の充実 学校におけるスポーツ活動の推進 運動部活動の地域移行 地域におけるスポーツ活動の推進
③スポーツを行う習慣の確立 (主に成人期)	スポーツに親しむ機会の充実 3033 (サンマルサン) 運動の推進
④スポーツを通じた健康・生きがいづくり (主に円熟期)	レクリエーションスポーツの推進 体の状態や体力に応じた運動の推進

視点2 スポーツ活動を拓げる環境づくりの推進

施策	主な取組
⑤スポーツ活動の環境整備	スポーツ環境の基盤となる「人材」の育成 スポーツ環境の基盤となる「場」の充実 地域コミュニティの中心となる総合型地域スポーツクラブの質的充実 スポーツ医・科学の活用促進 クリーンでフェアなスポーツの推進
⑥アスリートの育成	競技力の向上 トップアスリートの育成

視点3 スポーツの持つ力による地域活性化、共生社会の実現

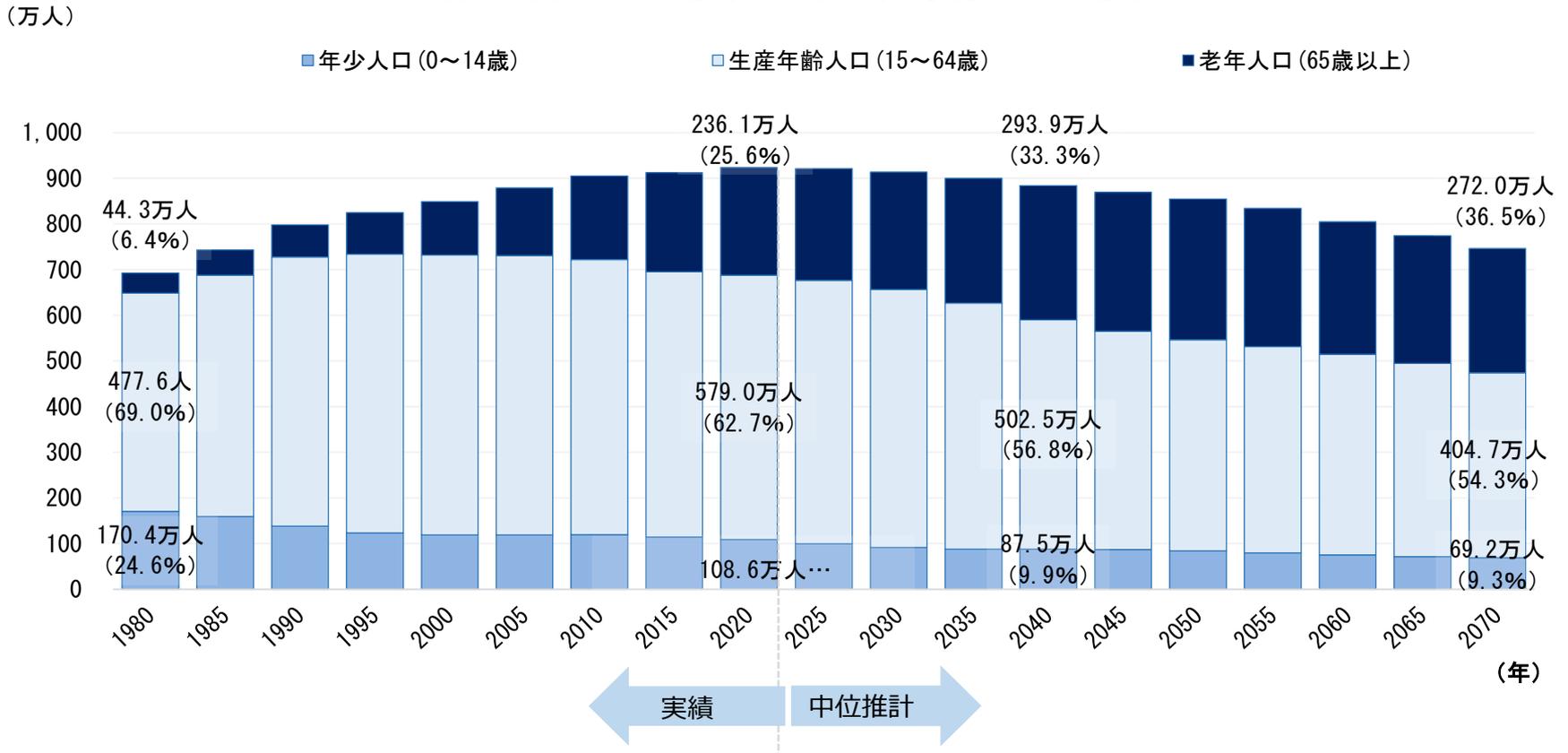
施策	主な取組
⑦スポーツの持つ力による地域活性化	スポーツを通じて地域を盛り上げる取組み 多様な主体との連携による地域活性化 東京2020大会等のレガシーを活用した取組み
⑧スポーツを通じた共生社会の実現	「かながわパラスポーツ」の推進 障がい者スポーツの推進 女性のスポーツ推進

2 社会の動向

1 少子化の進行と超高齢社会の加速

- 神奈川の総人口は、2020年にピークを迎えた。(923.7万人)
- 今後は、少子化の進行、高齢化の加速が続く。(65歳以上：2020年4人に1人 ⇒2040年3人に1人)

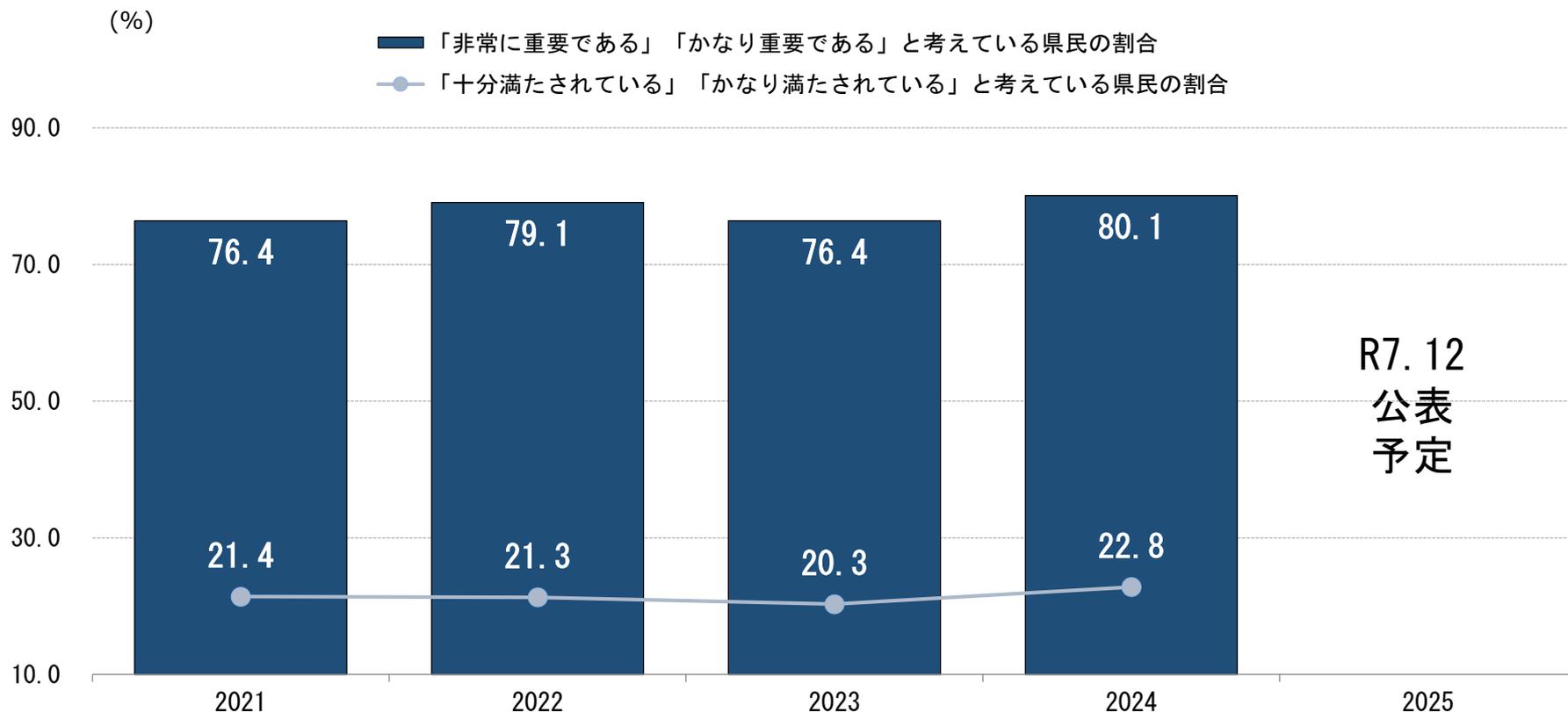
神奈川県人口推計（年齢3区分別・中位推計）



2 ゆとりと豊かさを求める県民と生活の状況

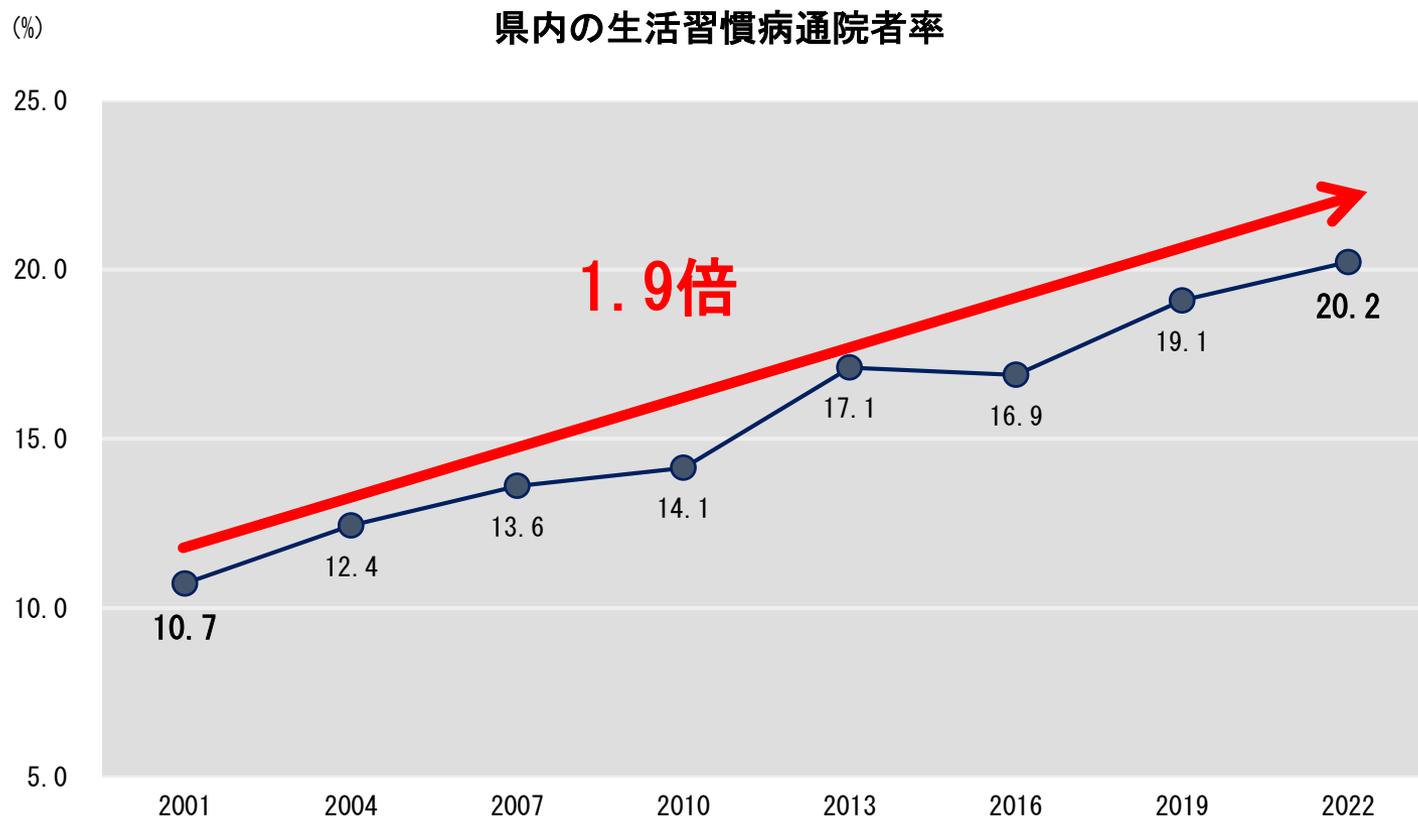
- ゆとりある生活が「重要である」と考える県民は、8割近くいる。
- 一方で、実際に「満足した生活」を過ごせている県民は、2割にとどまる。
- スポーツは、心の豊かさや充実感をもたらしてくれるものの一つとして重要な役割を担っているため、引き続き、スポーツを通じて生活の満足度を高めることが重要。

自由な時間や休日が多く、ゆとりある生活ができること



3 生活習慣病の増加

- 県内の生活習慣病通院者率は、2001（平成13）年から2022（令和4）年までの間に1.9倍増加（10.7%⇒20.2%）。
- 子どもから高齢者までスポーツの習慣化を促し、生活習慣の改善を図ることによって、健康で活力ある社会を築くことが重要。

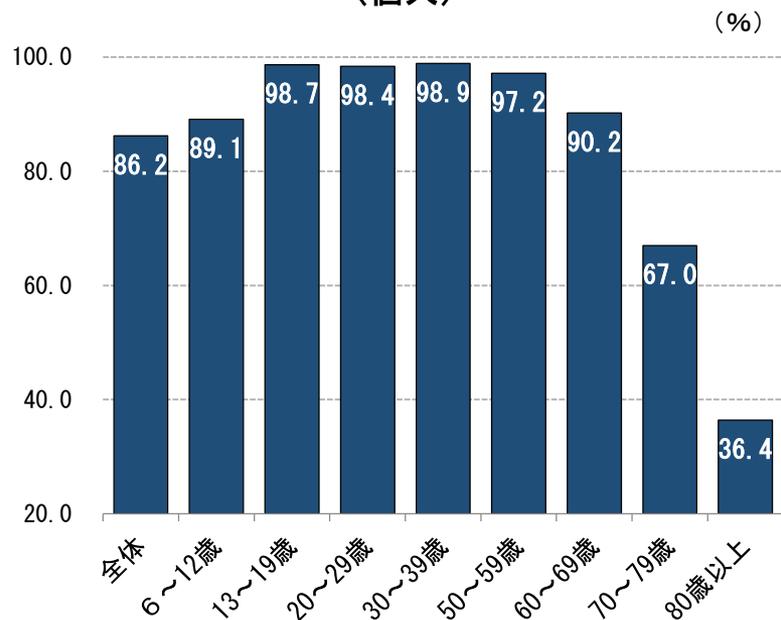


出典 | 厚生労働省 | 国民生活基礎調査をもとにスポーツ課作成 | 2001-2022

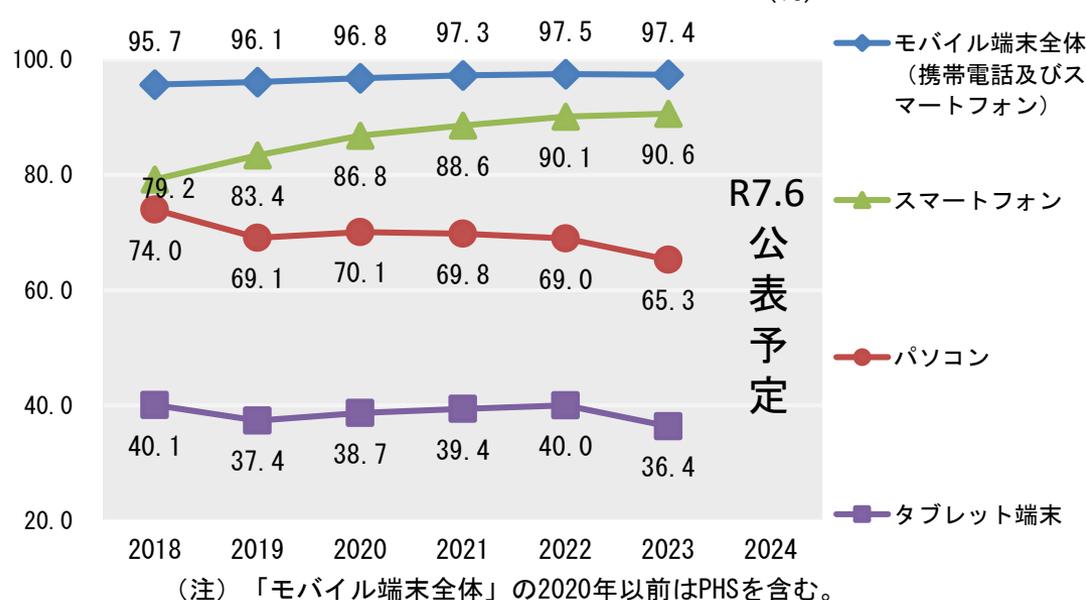
4 デジタル化の加速

- インターネット利用者の割合は、13～69歳の各年齢階層で9割を超えている。
- あらゆる時間・場所でネットワークにつながることのできる社会になっている。
- 今後は、「観る」スポーツの普及やトレーニングでの活用等、様々な形でのスポーツを「する」「観る」「支える」の可能性が広がると考えられる。

令和5年度のインターネット利用状況
(個人)



主な情報通信機器の世帯保有状況
(%)



出典 | 総務省 | 通信利用動向調査をもとにスポーツ課作成 | 2019-2024

5 差別や偏見のない共生社会

- 津久井やまゆり園事件をきっかけに、「ともに生きる社会かながわ憲章」の策定や、理念を広めていくため、「神奈川県当事者目線の障害福祉推進条例」を制定。
- 新かながわグランドデザイン実施計画（令和6（2024）年3月）において、政策の立案・企画・実施に当たっては、「ジェンダー」、「ともに生きる（ともいき）」「当事者目線」の視点を「3つの主流化」として常に意識することが示された。
- 引き続き、スポーツを通じた共生社会の実現に取り組む必要がある。

共生社会の実現に向けた動き

【平成】

28年7月 津久井やまゆり園事件
10月 「ともに生きる社会かながわ憲章」
策定



【令和】

5年4月 「神奈川県当事者目線の障害福祉推進条例～ともに生きる社会を目指して～」施行

6年3月 「神奈川県当事者目線の障害福祉推進条例～ともに生きる社会を目指して～に基づく基本計画」策定

3つの主流化

政策の立案・企画・実施に当たっての視点

- ジェンダー
- とともに生きる（ともいき）
- 当事者目線

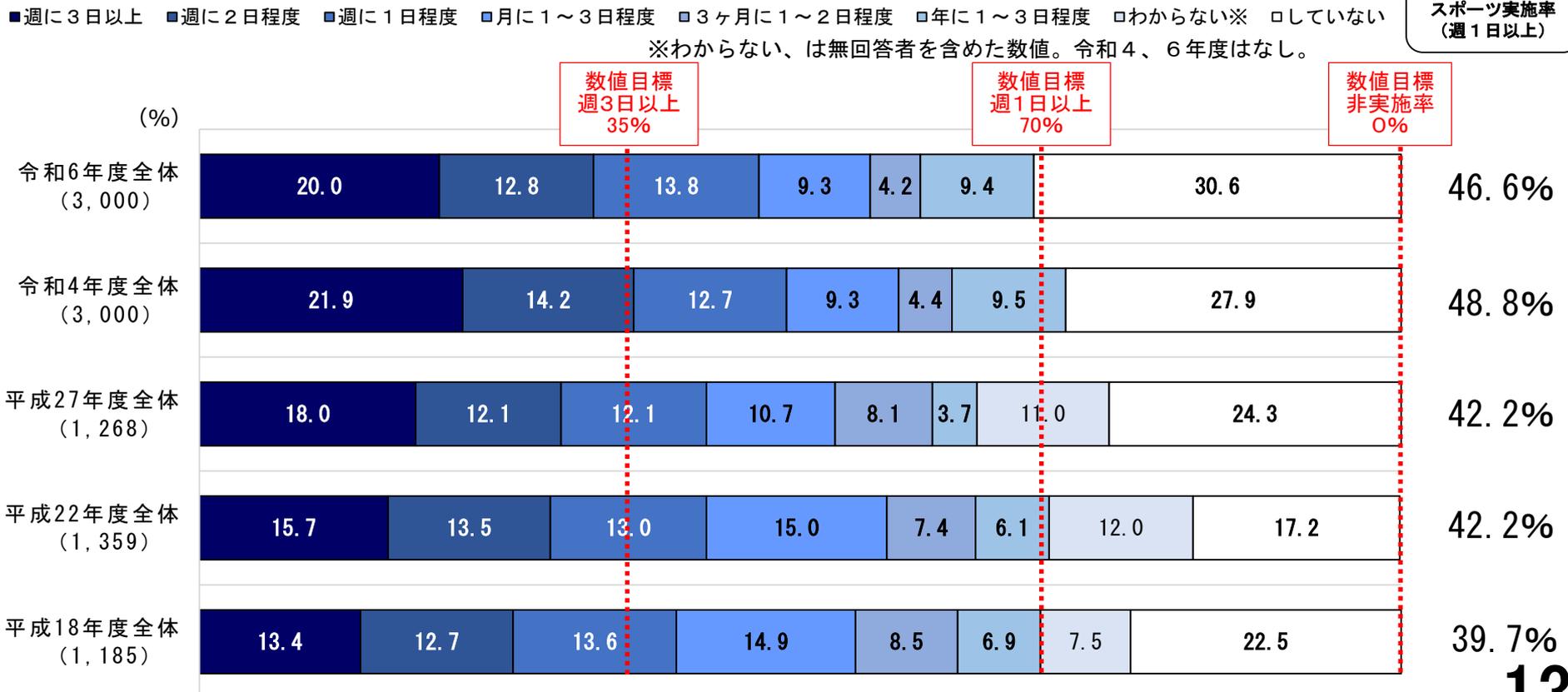
※新かながわグランドデザイン実施計画
（令和5（2024）年3月）

3 成人のスポーツの状況

1 成人のスポーツの状況（実施状況）

- 令和6年度の成人の週1日以上のスポーツ実施率は46.6%、週3日以上は20.0%、非実施率は30.6%。
- 実施率は、平成27年度以前と比べると増加傾向だが、前回調査の令和4年度からは減少。
- 非実施率は、増加傾向が顕著。

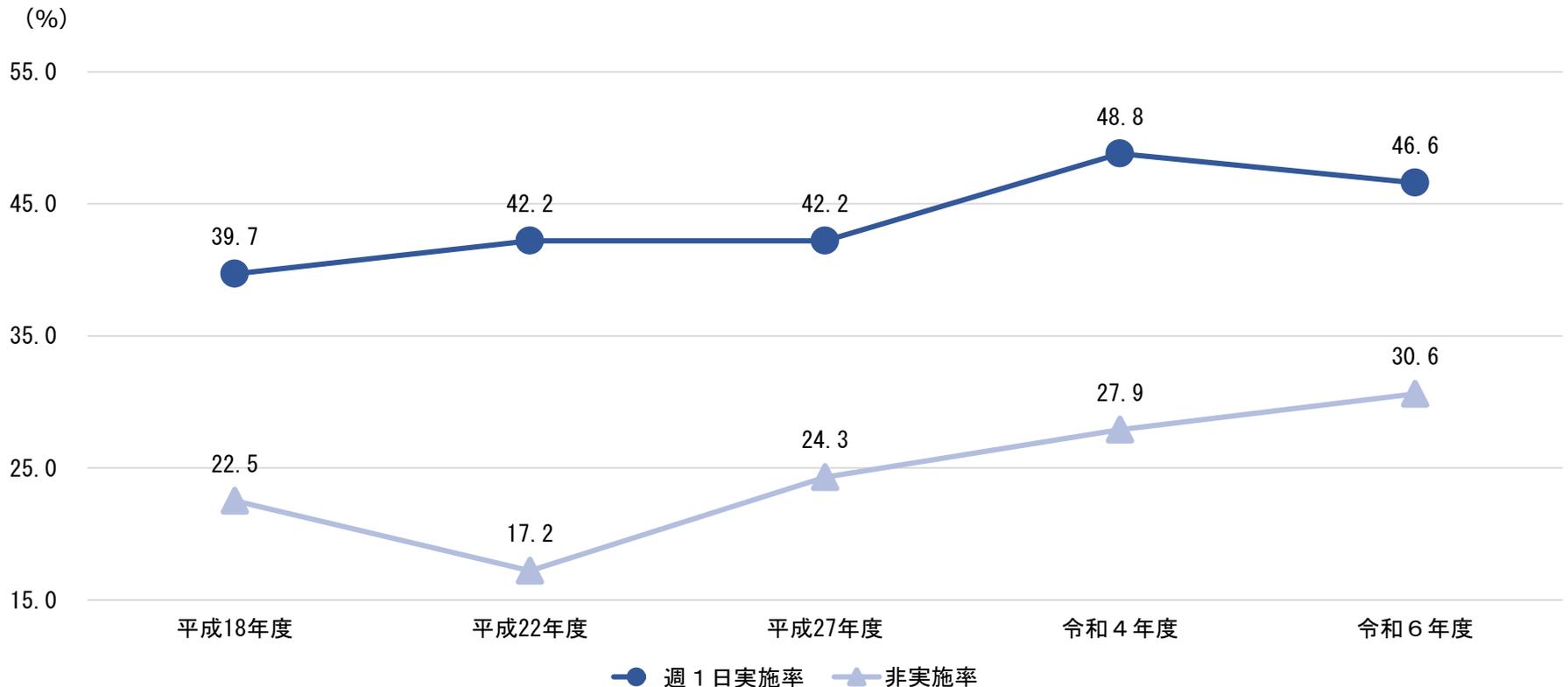
成人のスポーツ実施状況の推移



2 成人のスポーツの状況（実施率と非実施率の比較）

- 実施率は増加傾向にあるものの、非実施率はより増加傾向が顕著。
- スポーツをする人、しない人の二極化が進んでいる。

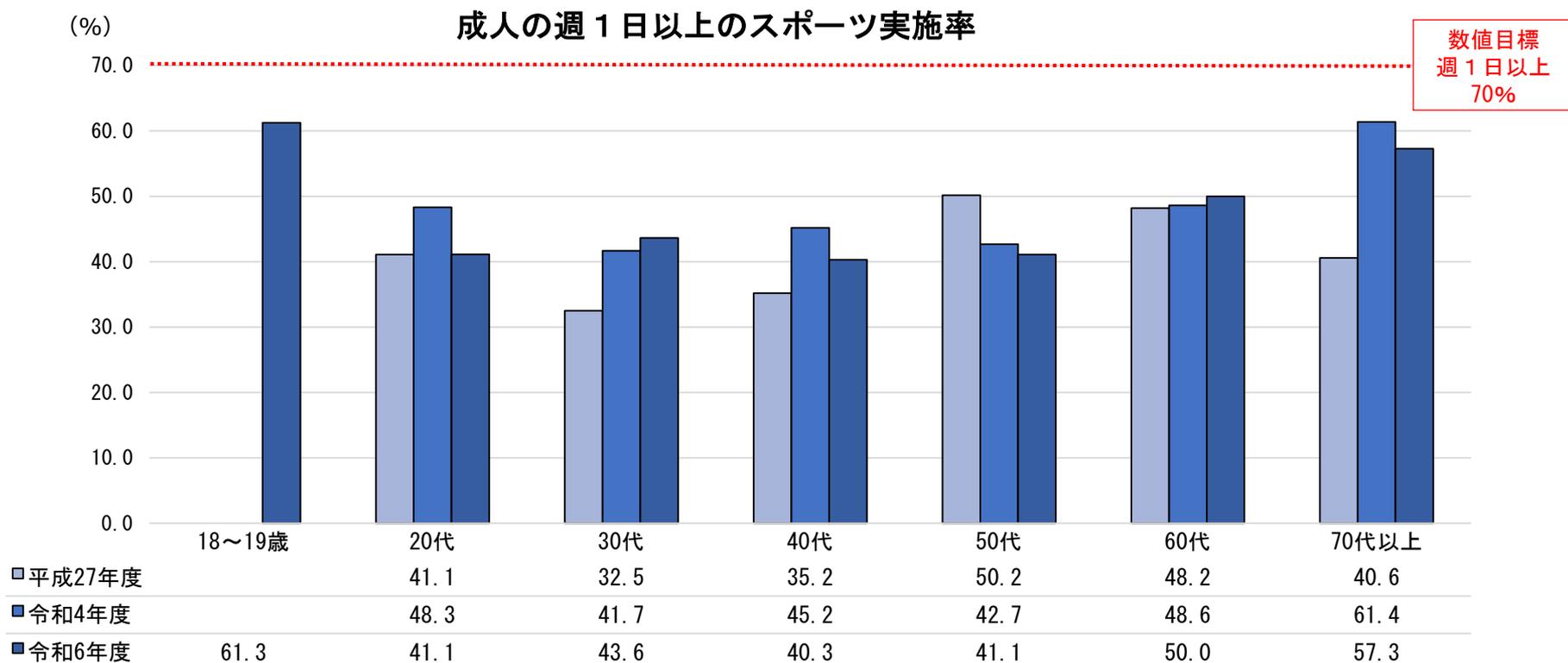
成人の週1日以上スポーツ実施率と非実施率の経年比較



出典 | 県民のスポーツ・体力に関する調査 | 2024

3 成人のスポーツの状況（年代別実施率）

- 20代から50代は40%程度であり、30代・40代は増加傾向、50代は減少傾向。
- 60代・70代は、50%以上かつ、過去から増加傾向。



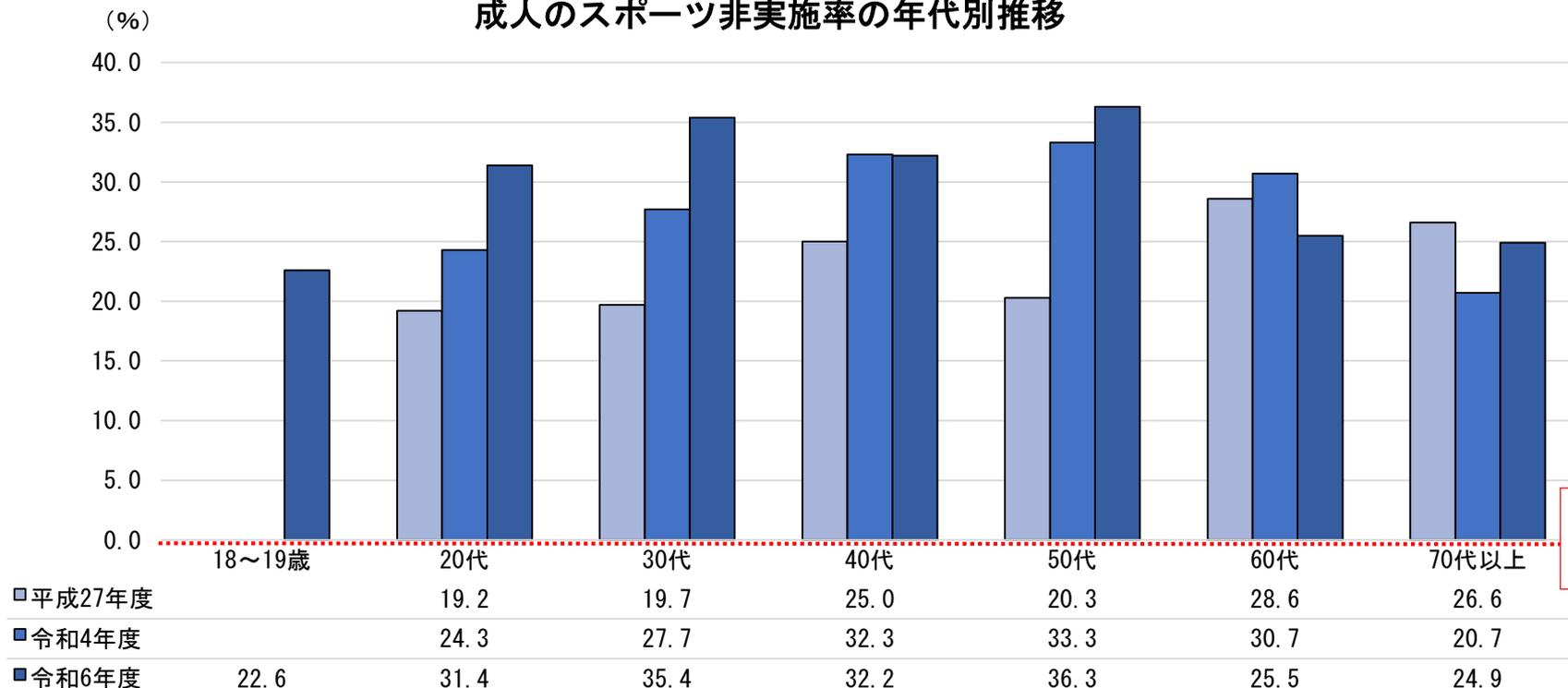
出典 | 県民のスポーツ・体力に関する調査 | 2024

4 成人のスポーツの状況（年代別非実施率）

- 20代から50代の働く世代の増加が顕著。（H27：5人に1人⇒R6：3人に1人）
- 一方で、60代・70代以上は、やや減少傾向。（H27：4人に1人⇒R6：4人に1人）

非実施率の割合が逆転

成人のスポーツ非実施率の年代別推移

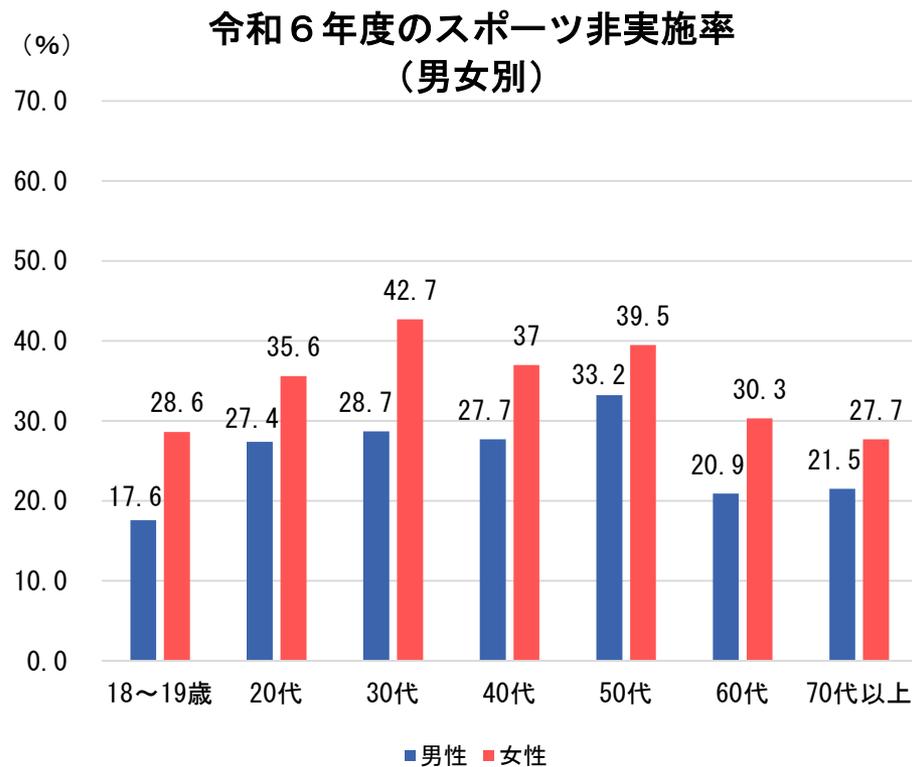
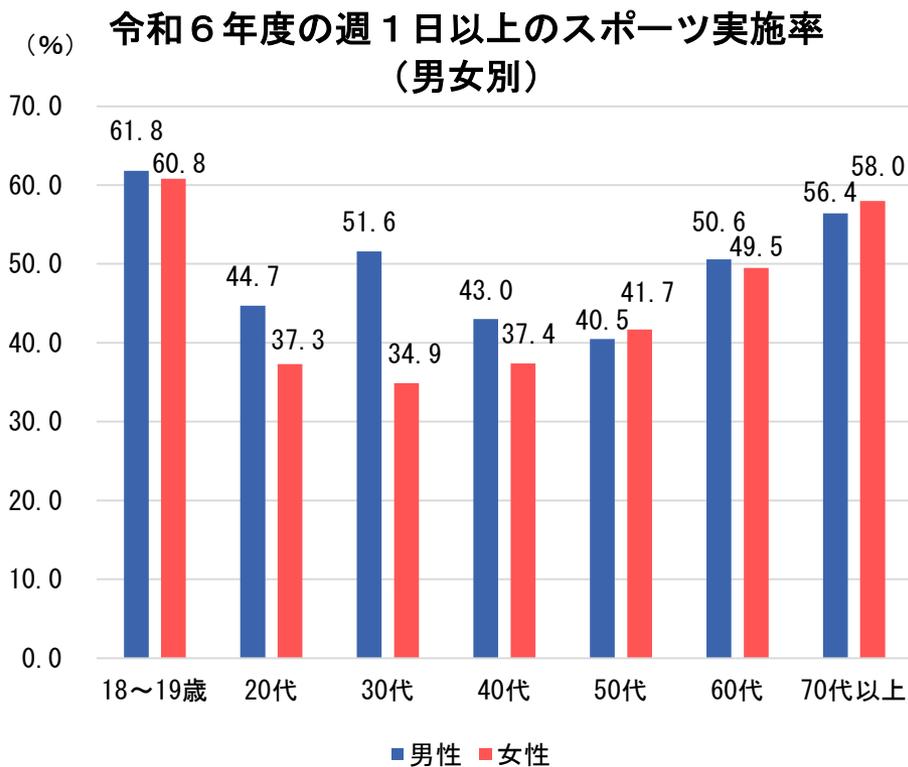


数値目標
非実施率
0%

出典 | 県民のスポーツ・体力に関する調査 | 2024

5 成人のスポーツの状況（年代別・男女別）

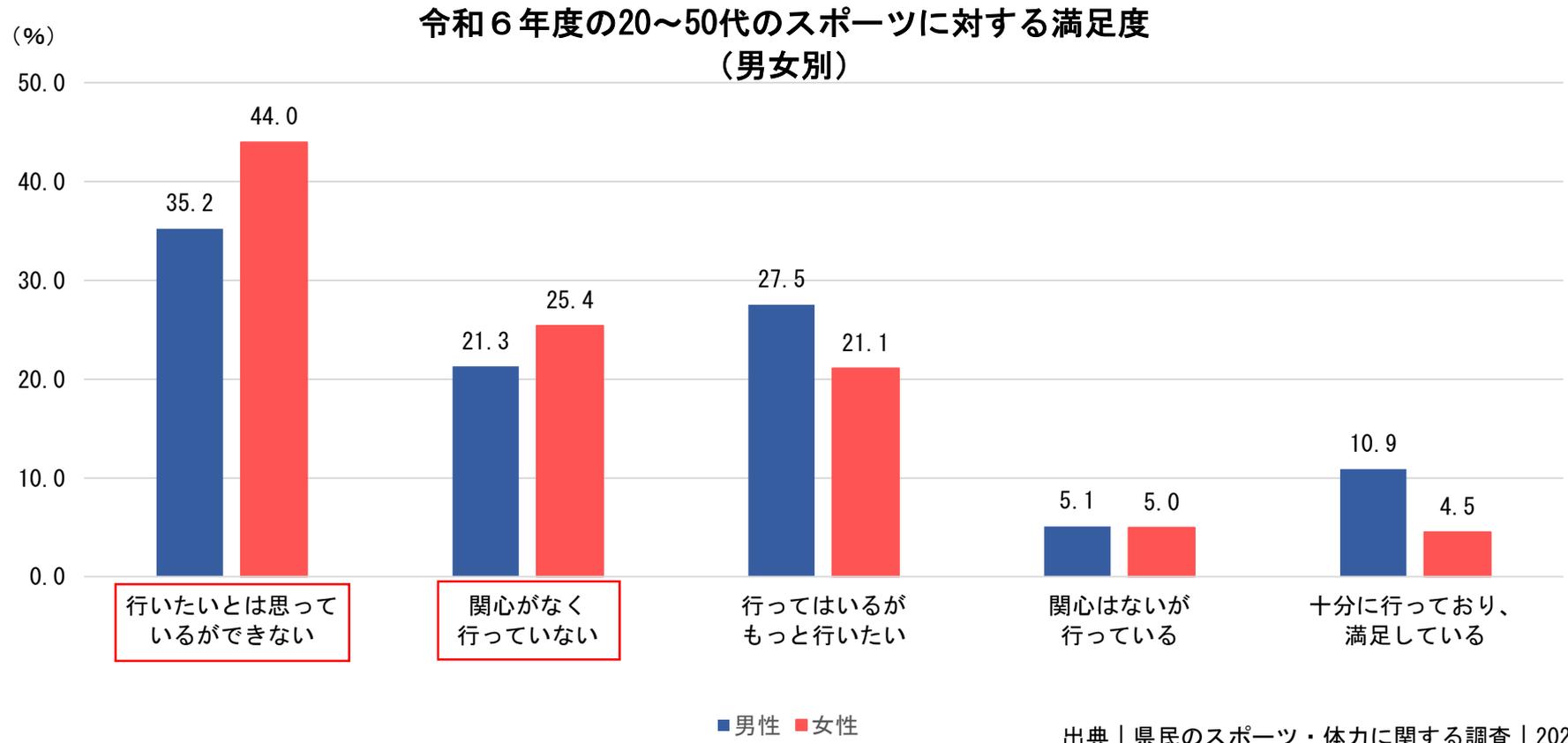
- 実施率は、男女ともに20代から50代がおおむね低い。
- 非実施率は、男女ともに20代から50代が高い。



出典 | 県民のスポーツ・体力に関する調査 | 2024

6 成人のスポーツの状況（20代～50代のスポーツに対する満足度・関心）

- 行いたいと思っているができない人が、男性3人に1人（35.2%）、女性約半数（44.0%）。
- 関心がなく、行ってない（無関心層）は、男性5人に1人（21.3%）、女性4人に1人（25.4%）。

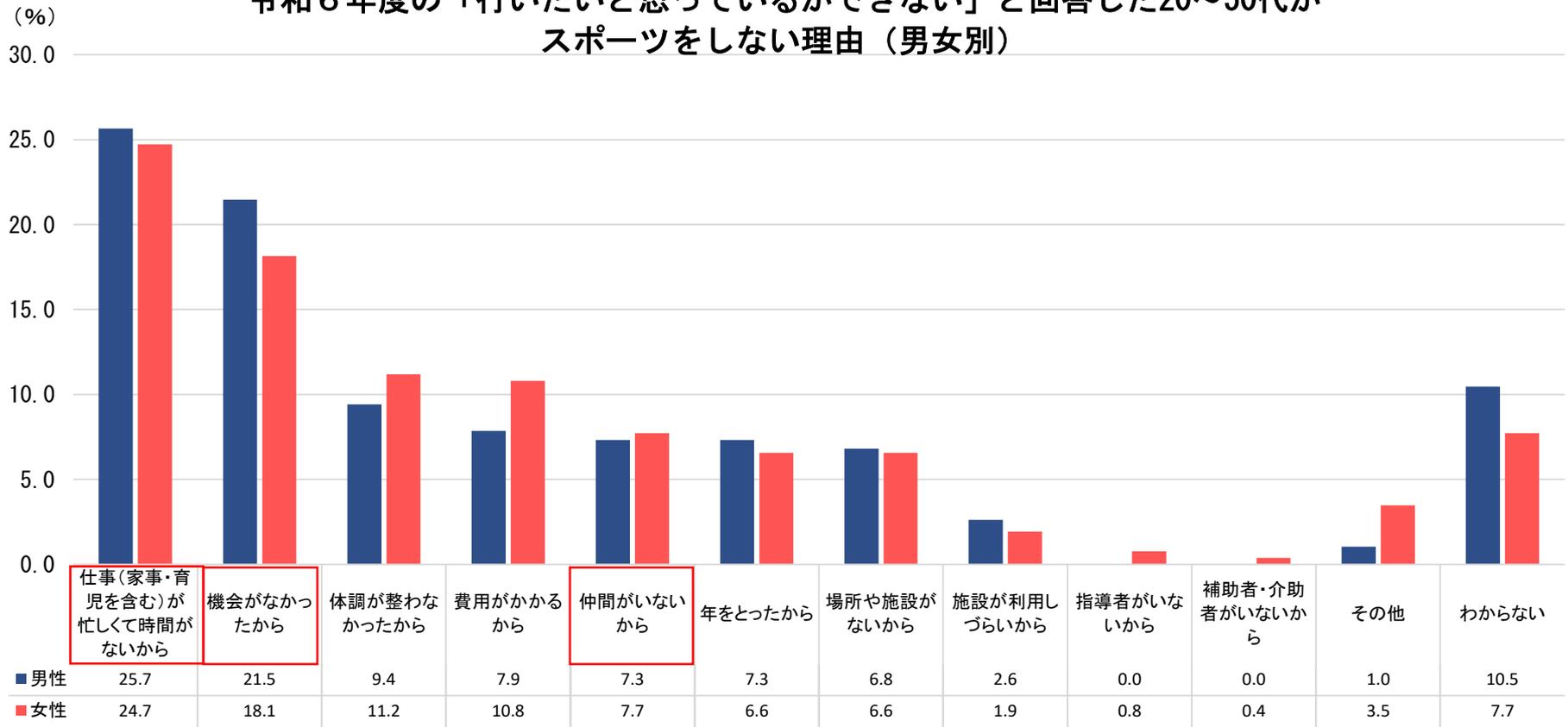


出典 | 県民のスポーツ・体力に関する調査 | 2024

7 成人のスポーツの状況（「行いたいと思っているができない」と回答した20～50代がスポーツをしない理由）

- 男女ともに、4人に1人が「仕事が忙しくて時間がないから」を選択。
- 「機会がなかったから」、「仲間がいないから」といった、スポーツをするきっかけに関する理由を合計すると、4人に1人が選択。

令和6年度の「行いたいと思っているができない」と回答した20～50代がスポーツをしない理由（男女別）



出典 | 県民のスポーツ・体力に関する調査 | 2024

8 成人のスポーツの状況（まとめ）

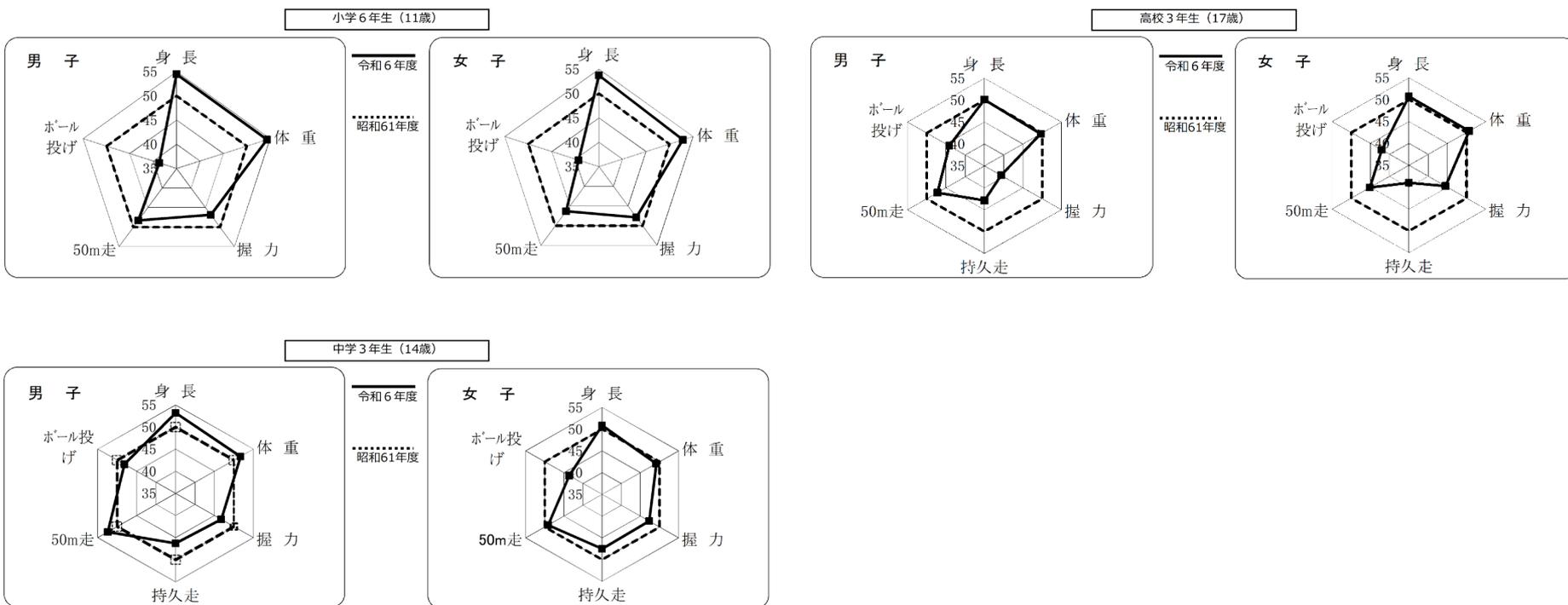
- 成人のスポーツ実施率は、増加傾向にあるものの、非実施率の増加も顕著であり、スポーツをする人、しない人の二極化が進んでいる。
- 特に20代から50代の働く世代の実施率は低く、非実施率が高くなっており、その理由としては、「仕事（家事・育児を含む）が忙しくて時間がない」「スポーツをするきっかけがない（機会がない・仲間がいない）」で半数を占めている。
- 60代以上の実施率は伸びていることから、働く世代のゆとりある生活やスポーツに取り組むきっかけづくりが特に課題と考えられる。

4 子どものスポーツの状況

1 子どものスポーツの状況（体格・体力・運動能力）

- 体格（身長・体重）は、早期の成長傾向が見られる一方、第二次性徴のピークを過ぎた高校3年生ではほぼ変わらない。
- 一方、体力・運動能力は大きく低下。

令和6年度の児童・生徒の体格・体力・運動能力と昭和61年度との比較

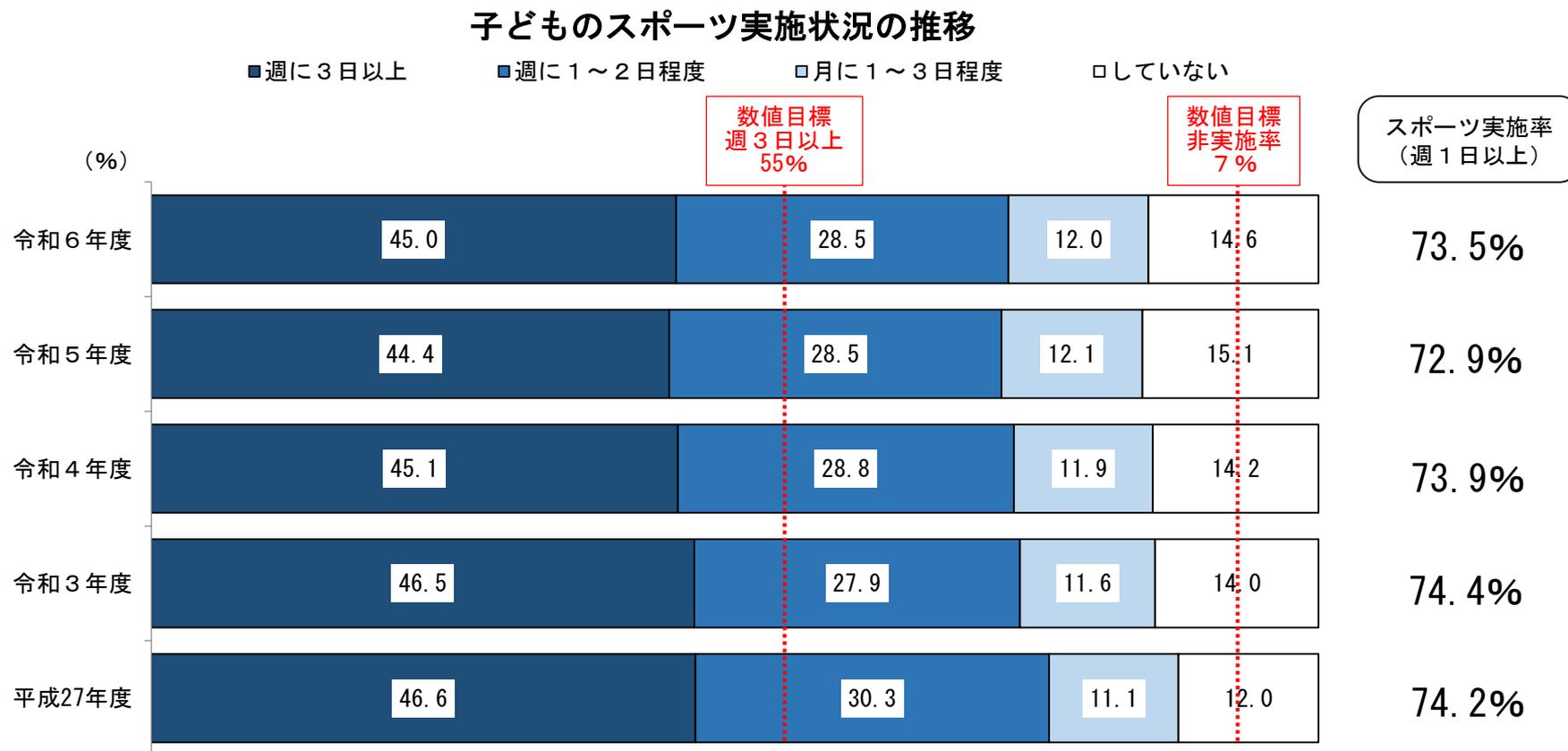


※ 過去38年間で体力・運動能力が最高値であった1986（昭和61）年度平均値を50として、2024（令和6）年度平均値の指数を割り出しており、数値が大きいほど記録が良い。

出典 | 神奈川県 | 児童生徒体力運動能力調査よりスポーツ課作成 | 2024

2 子どものスポーツの状況（実施状況）

- 令和6年度の週3日以上の実施率は45.0%。
- ここ数年は、週3日以上・週1日以上はやや減少傾向。非実施率はやや増加傾向。

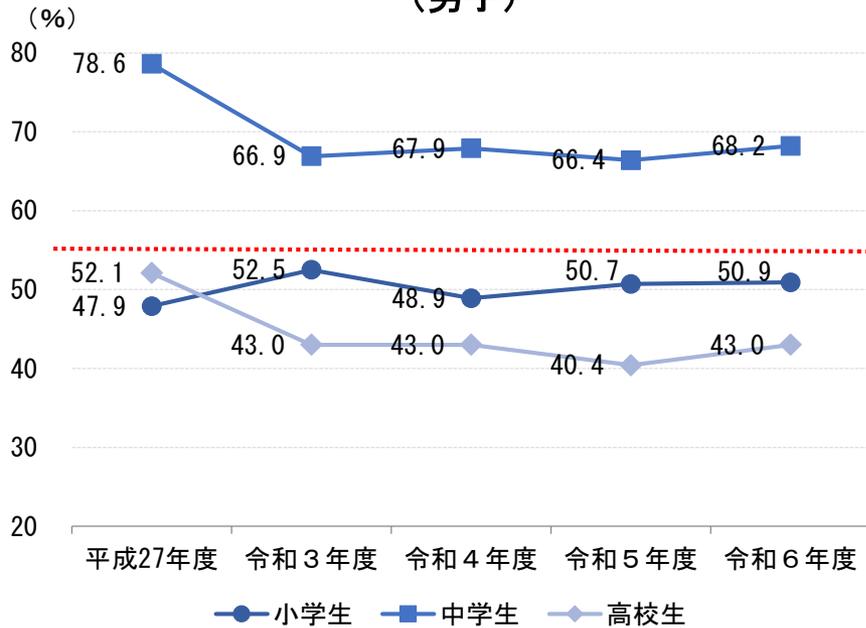


出典 | 神奈川県 | 児童生徒体力運動能力調査よりスポーツ課作成 | 2019-2024

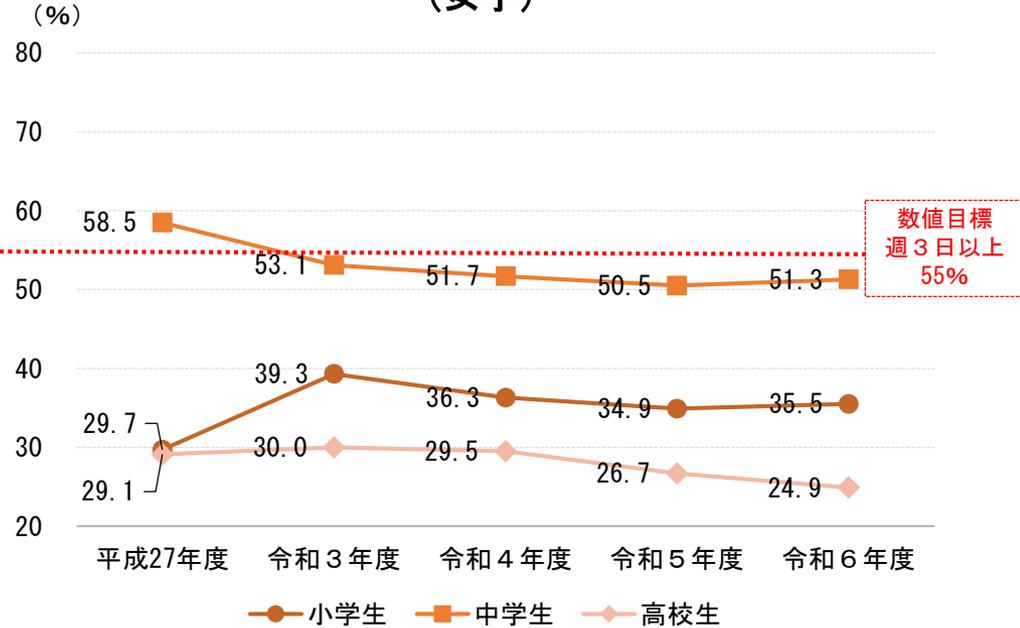
3 子どものスポーツの状況（校種別・男女別のスポーツ実施率）

- 中学生男子以外は、推進計画の数値目標（55%）未達。
- 女子よりも男子のほうが、どの校種でもスポーツ実施率が高い。

子どもの週3日以上の実施率
(男子)



子どもの週3日以上の実施率
(女子)

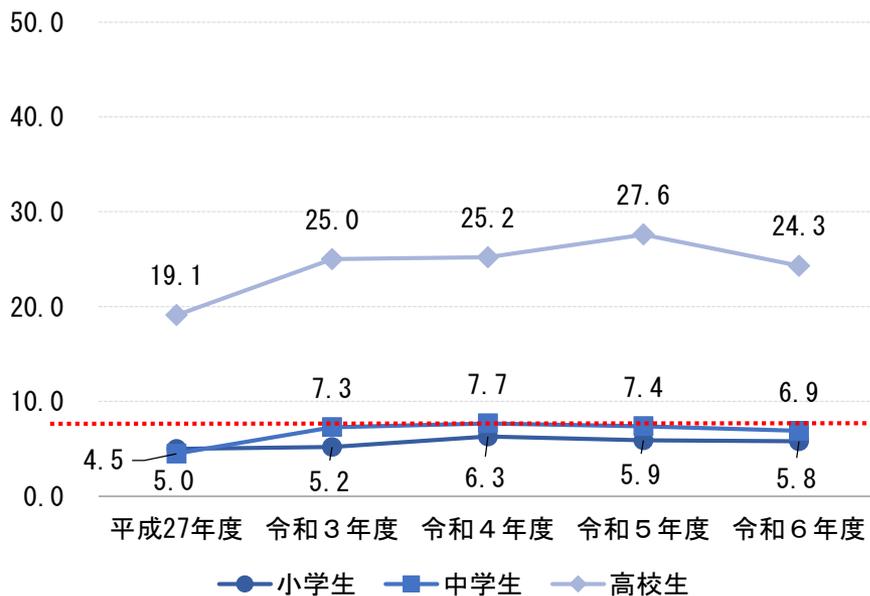


出典 | 神奈川県 | 児童生徒体力運動能力調査よりスポーツ課作成 | 2019-2024

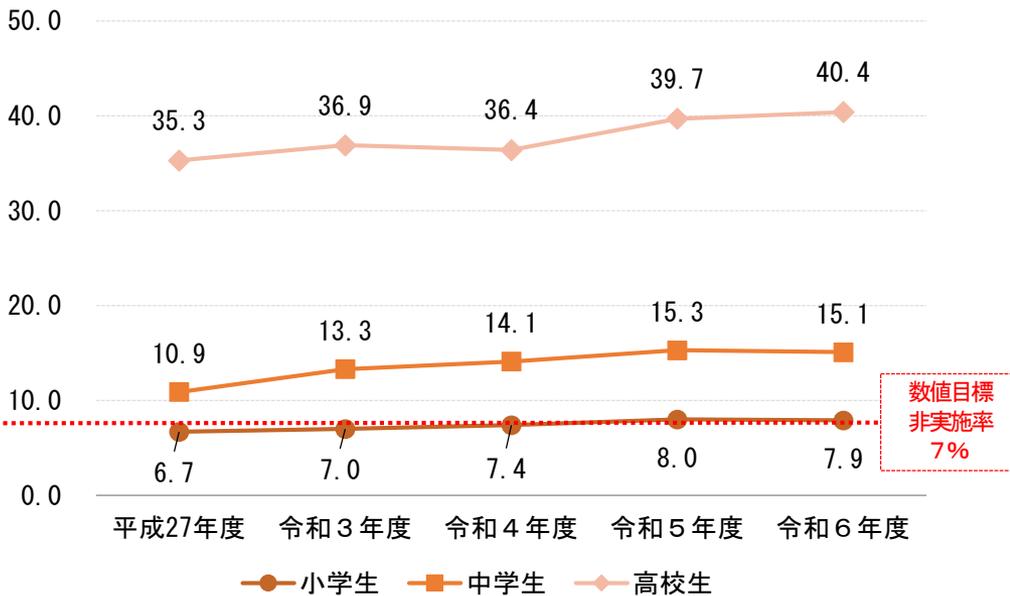
4 子どものスポーツの状況（校種別・男女別のスポーツ非実施率）

- 小学生男女、中学生男子は、推進計画の数値目標（7%）に近い。
- 小学生は、男女で大きな差はないが、中学生、高校生と年齢が上がるにつれ、非実施率の上昇が、男子より女子の方が顕著になる。

子どものスポーツ非実施率
(男子) (%)



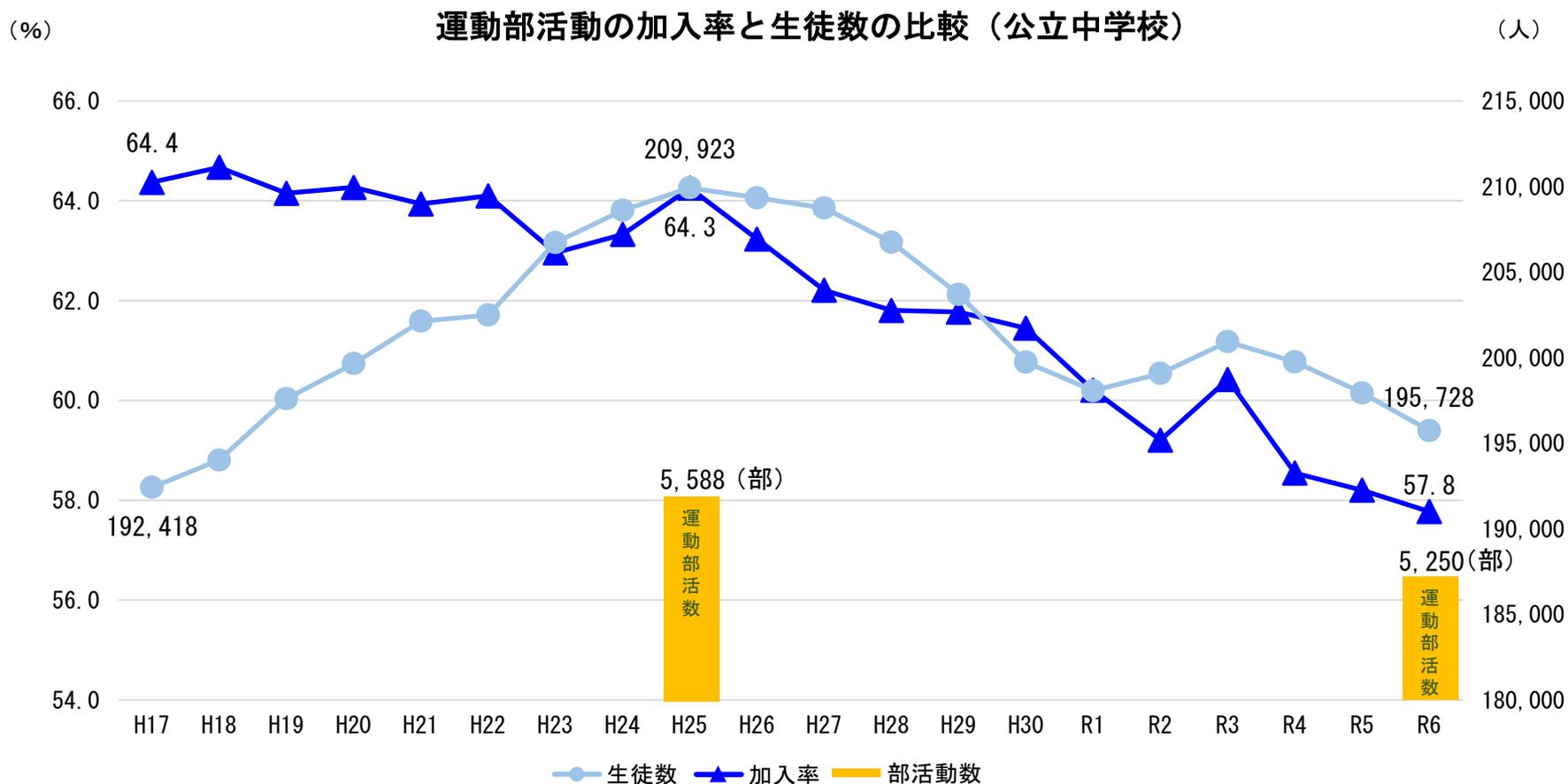
子どものスポーツ非実施率
(女子) (%)



出典 | 神奈川県 | 児童生徒体力運動能力調査よりスポーツ課作成 | 2019-2024

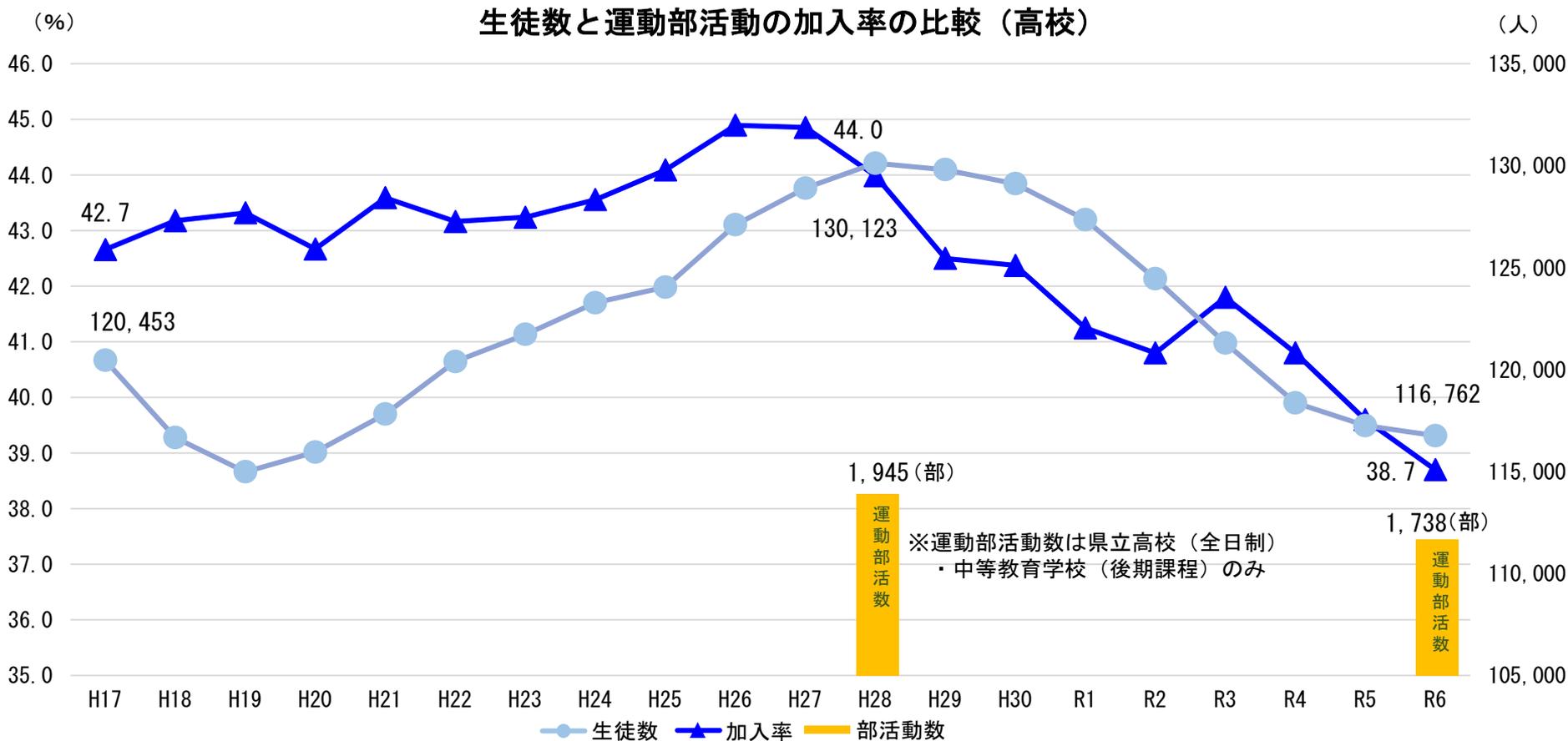
5 生徒数と運動部活動の加入率（公立中学校）

- 過去20年間で、生徒数は平成25年度をピークに減少。
- 運動部活動数及び加入率も減少傾向。



6 生徒数と運動部活動の加入率（高校） ※市立を含む全日制

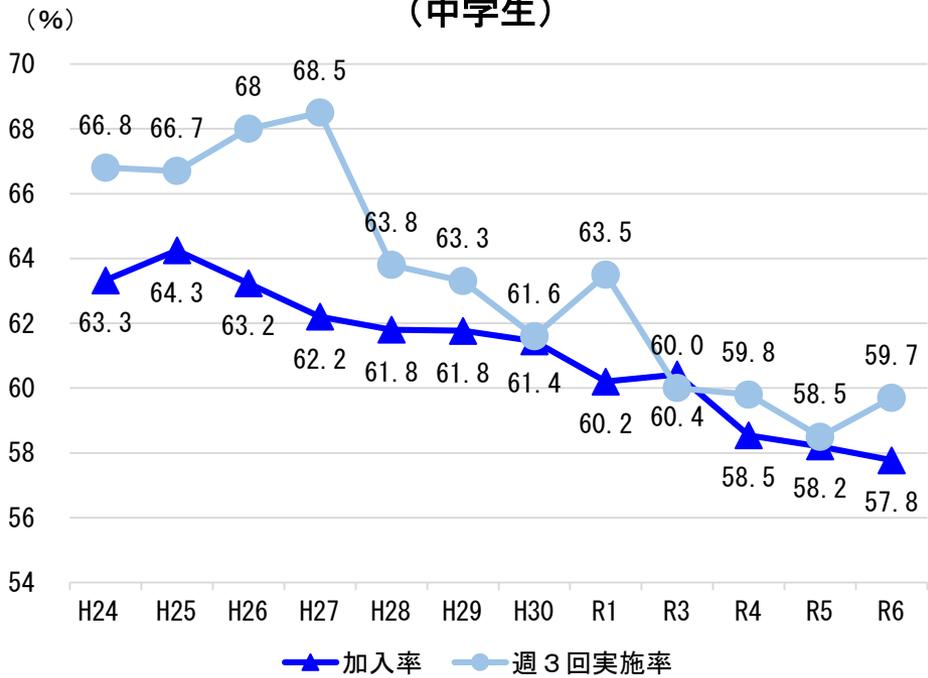
- 過去20年間で、生徒数は平成28年度をピークに減少。
- 運動部活動数及び加入率も減少傾向。



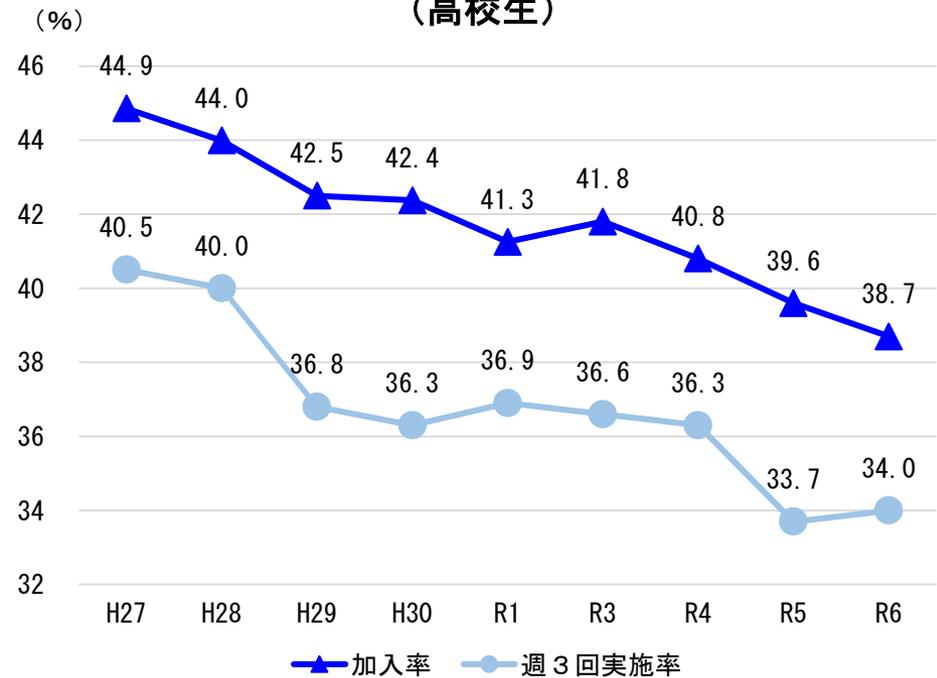
7 運動部活動の加入率（スポーツ実施率との関係）

○ 運動部活動の加入率とスポーツ実施率は、中学生、高校生ともに減少傾向。

運動部活動の加入率とスポーツ実施率
(中学生)



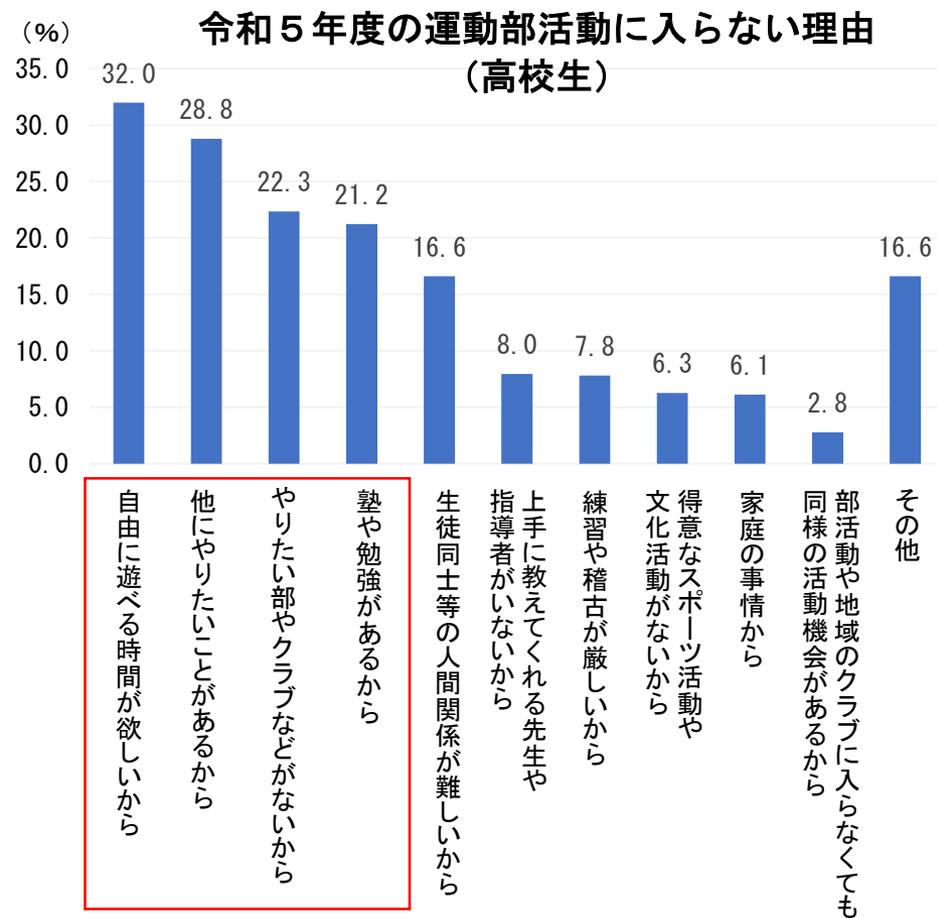
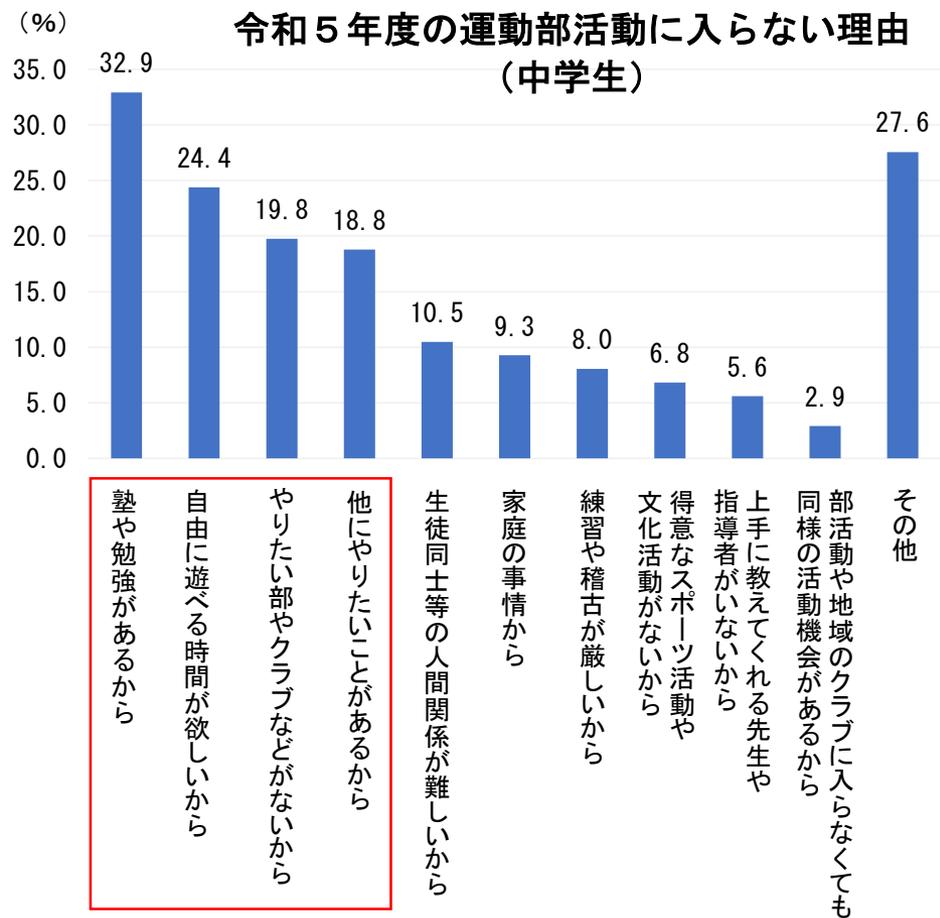
運動部活動の加入率とスポーツ実施率
(高校生)



出典 | 神奈川県中学校体育連盟 | 神奈川県公立中学校運動部活動調査よりスポーツ課作成
出典 | 神奈川県教育委員会 | 県立高等学校及び県立中等教育学校部活動基本調査よりスポーツ課作成

7 運動部活動に入らない理由（中学生・高校生）

○ 中学生、高校生ともに、「塾や勉強」のほか「自由に遊べる時間」「やりたい部活やクラブがない」「他にやりたいことがある」という声が多い。



8 子どものスポーツの状況（まとめ）

- 子どものスポーツ実施率は、ここ数年、やや減少傾向で、非実施率はやや増加傾向。
- 子どものスポーツの状況は、小学校・中学校・高校の各区分ごとに差が大きく、また、男女においても差が大きくなっている。
- 生徒数の減少は、部活動数の減少につながっていると考えられる。今後は、子どもの活動機会をより一層確保していくことが求められる。

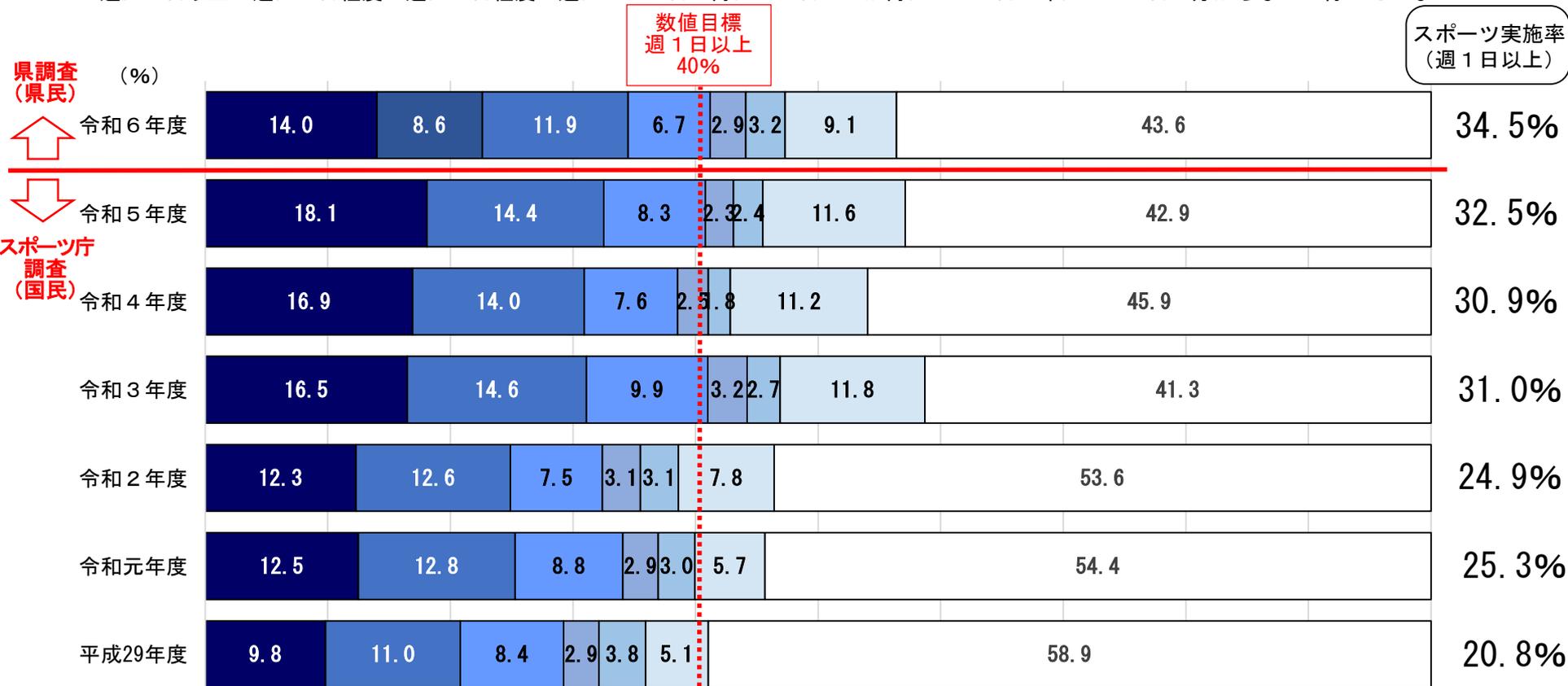
5 障がい者のスポーツの状況

1 障がい者のスポーツの状況（実施状況）

- 令和6年度の障がい者の週1日以上の実施率は34.5%。
- 数値目標の40%には届いていないが、スポーツ庁のこれまでの調査による実施率より高い。

障がい者のスポーツ実施状況

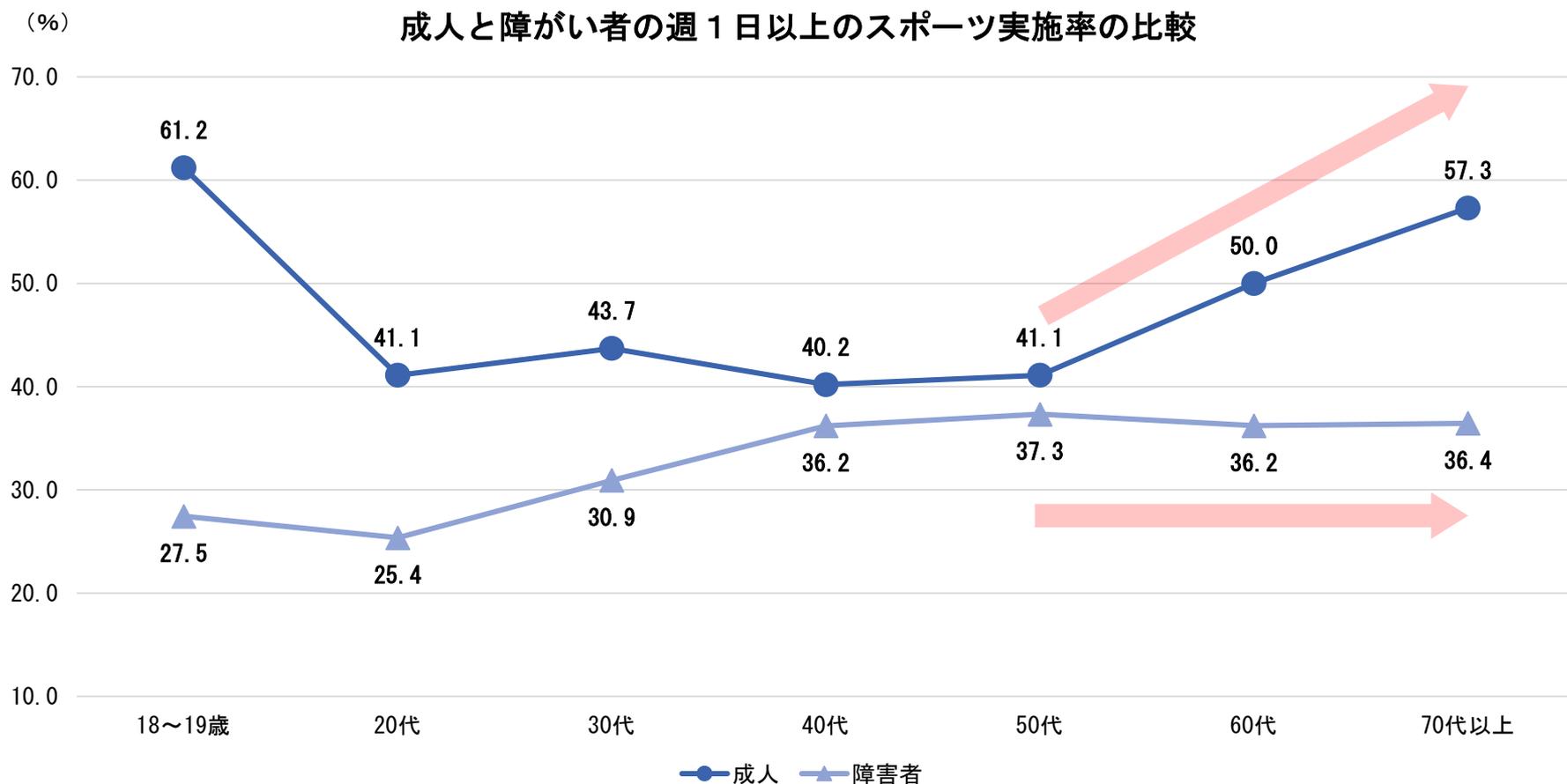
■週に3日以上 ■週に2日程度 ■週に1日程度 ■週に1～2日 ■月に1～3日 ■3か月に1～2日 ■年に1～3日 □分からない □行っていない



出典（平成29年度～令和5年度） | スポーツ庁 | 障害児・者のスポーツライフに関する調査よりスポーツ課作成
 出典（令和6年度） | 神奈川県 | 障害者のスポーツに関する調査よりスポーツ課作成

2 障がい者のスポーツの状況（成人と障がい者の実施率の比較）

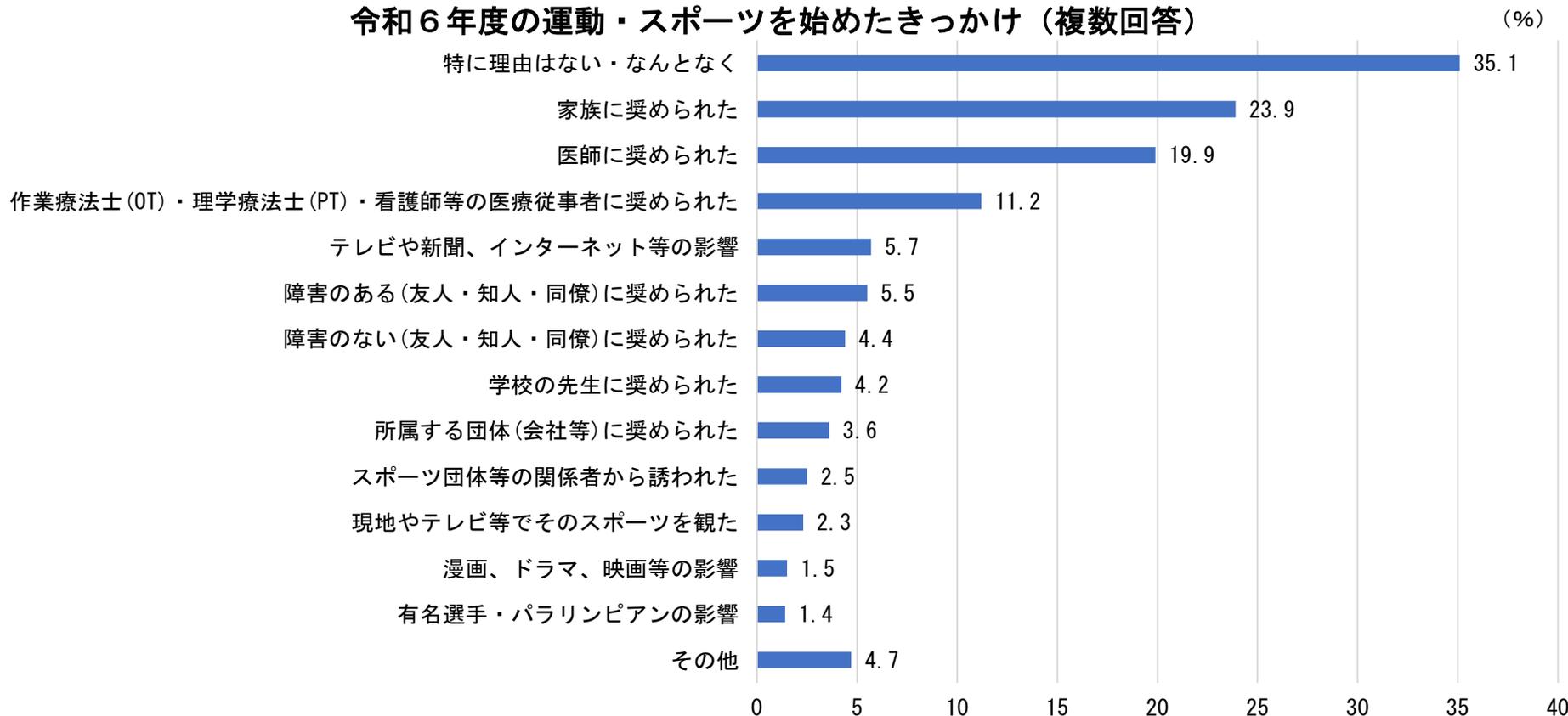
- 30代までは差があるものの、40代・50代は大きな差が無い。
- 成人は、60代以降に増加するものの、障がい者は、40代以降横ばい。



3 障がい者のスポーツの状況（運動・スポーツを始めたきっかけ）

- 「特に理由はない・なんとなく」が35.1%。
- 「家族に奨められた」、「医師に奨められた」など、誰かに奨められたと回答した割合が多い。

令和6年度の運動・スポーツを始めたきっかけ（複数回答）

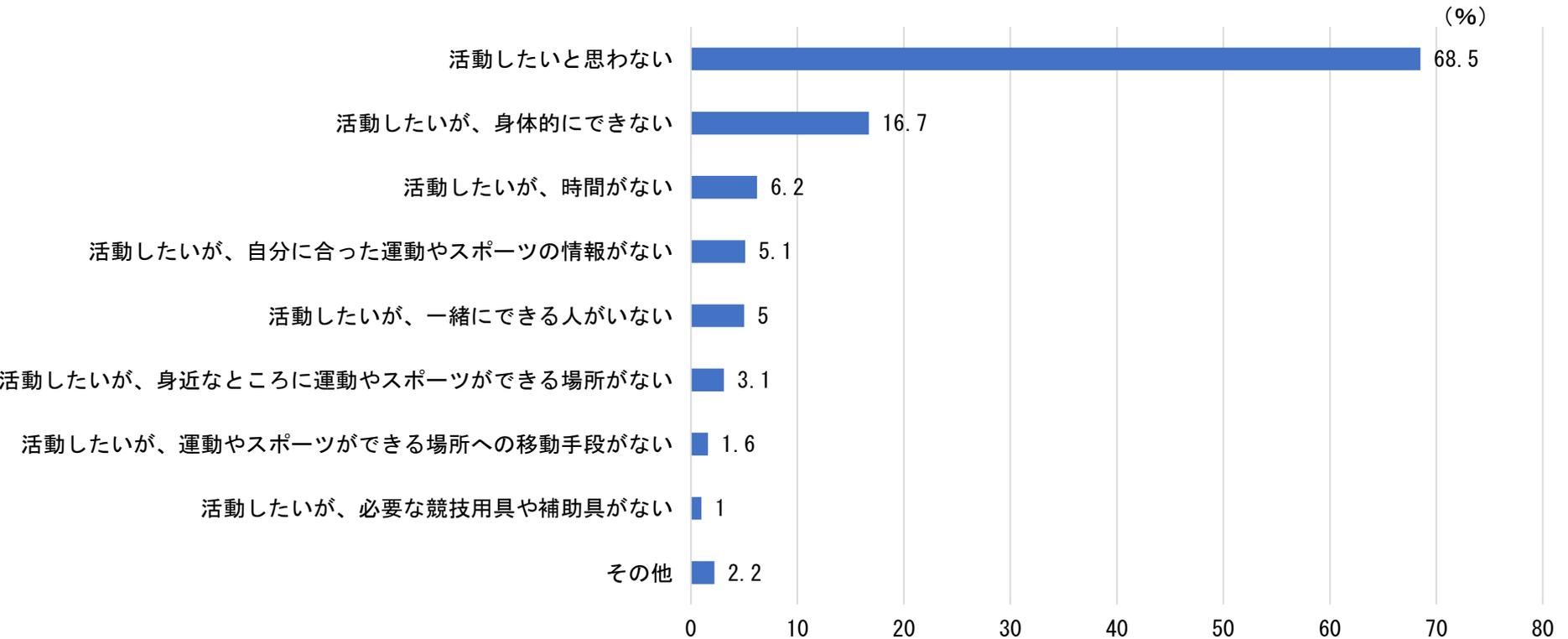


出典 | 障害者のスポーツに関する調査 | 2024

4 障がい者のスポーツの状況（運動・スポーツを行わなかった理由）

○ 「活動したいと思わない」が68.5%とほとんどを占めている。

令和6年度の運動・スポーツを行わなかった理由（複数回答）



出典 | 障害者のスポーツに関する調査 | 2024

5 障がい者のスポーツの状況（まとめ）

- 令和6年度の障がい者の週1日以上スポーツ実施率は34.5%で、令和5年度以前の全国の数値と比べると実施率は高い。
- 成人・子どもと比べるとスポーツ実施率は低いが、働く世代の40代・50代では、成人と大きく変わらない。
- しかしながら、高齢期を迎える60代以降では、成人の実施率と差が出ていることから、引き続き、スポーツに親しむきっかけづくりが必要と考えられる。